

福崎町文化

第42号 令和8年3月5日 兵庫県神崎郡福崎町福田176番地の1 福崎町文化センター発行



国登録有形文化財
旧辻川郵便局

柳田國男「故郷七十年」

國男の小学校時代

北野区在住 埴岡 栄



『故郷七十年』で柳田國男は、「昌文小学校のことなど」、「辻川のみち」として子供の頃通った田原の昌文小学校時代のことを述べております。しかし、

- ・『故郷七十年』の記述だけでは実態を掴むのは難しい点
- ・今回明らかになったこと、明らかになりたいこと

をご紹介しますと思います。

「昌文小学校のことなど」

もともと、私は五歳の時に辻川の小学校に上っているから、九歳で当時の田原にあった昌文小学校をすでに卒業し、北条の町に移って高等小学校へはいっていったわけだ。

ここで一寸そのころの小学校の思

通った昌文小学校があった。

柳田國男は、昌文小学校の校長として勤務していた長兄鼎の計らいで、明治十二年（一八七九）の春、数えの五歳で昌文小学校に入学して九歳で卒業し、北条の町に移って高等小学校に入ったと書いており、その小学校は、生野から姫路に向かう馬車道沿いの三木家を過ぎて、巖橋という新しい石橋が架かっていたが、岩尾川の上流には岩尾神社というお宮があり、「それに向って左の所に私らが通った昌文小学校があった。」と書いています。

しかし、巖橋から岩尾神社に向かって「左側」方向となると東三木家横の西田原字西廣岡九九八に出来た新昌文小学校の方向となりますが、学校が新設されたのは明治十六年（一八八三）七月でありますから皆と同じ十六年春の卒業ならまだ建設中でありましたし、通学するには巖橋を渡らず手前で曲がる事になります。同じ辻川出身で北海道で財を築いた松岡源之助の伝記である『故松岡源之助翁追慕記』では、二歳年上であった松岡源之助が「やがて七歳、明治十二年四月、字田尻の円乗寺境内に有った昌文初等小学校え入学した。」「十一歳で芽出度卒業し、引

続いて木村塾に通って普通学及び算数を補修した。」と書いております。

今、岩尾川（雲津川）に新しく架けられた巖橋に行ってみると、南側に馬車道と交わる様に川に沿った道があり、そばの家が建つ所には横道がありました。この小道を辿って行くと熊野神社の北側に出ることになります。そこは熊野神社横の円乗寺への道になります。

当時の少年達は巖橋を渡り、この細道を通って学校に通っていたと推察できますが、この円乗寺の昌文小学校を卒業したのであれば、巖橋から見て小学校は岩尾神社に向かつて「右側」となります。

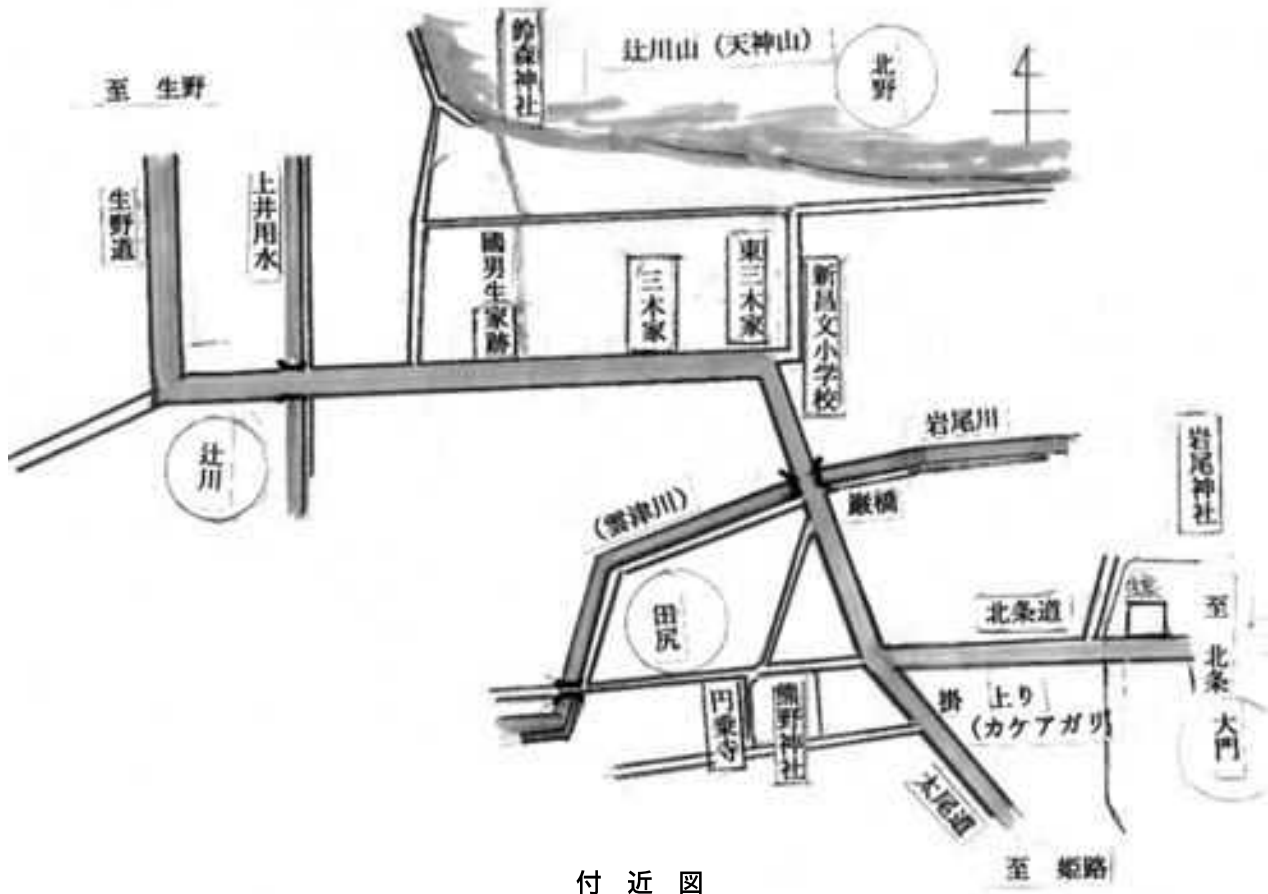
ところで國男が書いている通り、岩尾神社に向かつて「左側」に学校があったのなら、皆より一年遅く明治十七年に卒業しなくては新校舎はありませんので卒業年度を検証する必要がありますと考え、巖橋付近の散策のあとに、辻川山にある「柳田國男・松岡家記念館」を訪れました。

ここでは現在展示はされていませんが、國男の幼時の証書や表彰状が保管されているとお聞きし、國男の表彰状や卒業証書を閲覧しました。

「辻川のみち」

辻川の南を岩尾川という綺麗な細い川が流れている。北条の方から来る所に橋があり、その橋は私の見て

いる間に石橋にかけ代えられたのでよく知っている。それは姫路から来る国道がついた時のことであつた。その少し上流に岩尾神社というお宮がある。妙徳山の鎮守さんだったらしい。それに向って左の所に私らが



付 近 図

現在の「銀の馬車道」巖橋 付近



円乗寺 (元昌文小学校)



熊野神社 (円乗寺側) 出口

明治十五年十月五日
初等小学校第一級卒業

「(明治十五年十月以降分)



正面山が岩尾神社



右に熊野神社方向小道

明治十六年四月
中等科第六級卒業

明治十六年九月
中等科第五級卒業

明治十六年九月

中等科第四級卒業

明治十七年四月

中等科第三級卒業

明治十七年十月

中等科第二級卒業

平民 松岡國男 當十一月九年三

ケ月

小学中等科卒業候事

村立 昌文小學校

明治十七年十一月二十四日



岩尾神社に向かって「右側」の円

乗寺にあった初等昌文小学校を明治

十五年（一八八二）十月に早期卒業

し（一般は十六年卒業）、中等科に

進み、十六年（一八八三）七月から

は「左側」に出来た新昌文小学校中

等科に通い、翌十七年（一八八四）

十一月に卒業し、十二月頃から北條

小学校の高等科に通ったと思われま

す。

また「柳田國男・松岡家記念館」

には國男の父松岡操の明德小學校の

教員任命書と辞職願も保管されてお

りました。任命書には

「松岡操

第九大區第三小區

明德小學校二等

教員申付候事

但月給 金五圓

明治七年十月十五日

飾磨縣

松岡操の自筆辞職願には

「小学校教員辞職願

私儀去十月以来明德学校

教員被申付候所兎角疝痛

持病平癒仕兼候二付不得已

辞職支度此段奉懇願候以上

明治九年



新 昌文小学校跡地

一月十九日

第九大區 第一小區田尻村

明德小学

二等教員

松岡操

(中略)

飾磨縣參事 岡崎真鶴殿

と記載されております。



飾磨縣では明治五年六月より郡を大区とする「大区・小区制」を実施しており、任命書には明治七年当時の「区名、小学校名」として「第九大區第三小區明德小學校」は辻川村、田尻村であり、明治九年の辞任願いに書かれた「第九大區第一小區田尻村明德小學校」は田尻村に明德小學校があった事を示しており、『故松岡源之助翁追慕記』の昌文小學校が円乗寺にあったと云う事を裏付ける貴重な資料でありました。

『福崎町史第二巻』には「辻川の昌文小学校を卒業（当時は四年制）すると、東に約八キロメートル隔てた隣町の北條小学校高等科に入学、二年間通学して卒業、県知事の表彰をうける成績であった。」と書いて

あり、修業証書の写真もありました。

「平民 松岡國男 堂五月九年十ヶ月
小學校高等科第四級修業候事
明治十八年五月十日
町村立 北條小學校」



『福崎町史第二巻』より

『柳田国男八十八年史別巻（年譜上）』には、「明治十六年三月、昌文小学校を卒業する。四月、北条町にある高等小学校に入学し、二里の道を歩いて通学する。明治十七年夏から秋、家が売り払われる。明治十八年五月十日北条小學校高等科第四級を卒業し知事から表彰を受ける。それまでは寺を使っていたが、その年にお金を集めて新校舎を建設し、そこで初めての卒業式をやるうとなり、県令はその式典に臨んだ。」とあり、

どちらも昌文小学校を四年で卒業し、明治十六年四月から北條小學校の高等科に入ったとしており、円乗寺にあった昌文小学校を卒業した後、昌文小学校中等科に通ったことは抜け落ちておりました。

しかし正しくは、國男は明治十二年（一八七九）数えの五歳で入学と書いておりますから、中等科を卒業した明治十七年（一八八四）十一月数えの九歳ではなく十歳（卒業証書は満年齢の九歳三ヶ月）で昌文小学校中等科を卒業したのです。

また、明治十八年（一八八五）五月高等科第四級を卒業した際、成績優秀で知事が式典に臨んで褒状をもらったとしておりますが、『故郷七十年』では、その頃國男は北条の高等小学校へはいつていたわけで、「ここで一寸そのころの小學校の思い出になるが」とわざわざ書きおいて、田原の昌文小学校時代の事を書いておりますのでそれまでは寺を使っていたが、お金を集めて小学校を建て、初めての卒業式を盛大にして県令を呼んだというのは昌文小学校の卒業式での出来事であり、明治十八年ではなく十七年のことと考えるべきです。

昌文小学校が円乗寺小学校から新校舎を建設し移転したのは明治十六

年（一八八三）七月のことでしたから、國男が卒業した十七年（一八八四）十一月は初めての卒業式でありました。そしてこの時県令森岡昌純が式典に臨み國男は褒状をもらったと考えるのが自然です（但し県令の表彰状は見当たらないそうです）。

北條小學校が酒見寺から校舎を新設移転したのは明治十五年（一八八二）で國男の入学前のことであり、また県令の森岡昌純は、明治十八年（一八八五）四月七日に交代して農務省に転じて、十八年五月の式典には出席できなかったことになりましたので、北條小學校での話ではなかったのです。

その頃茨城県の長兄鼎からの仕送り金を國男が怖い思いをしながら北条までの二里の道を歩いて取りに行くのが國男の役目でありましたが、國男が北條小學校高等科に入学した明治十七年の暮には松岡家は辻川の家を売って北条に移り住んだので、その役目も終わり、二里の道を二年間通学したという事もなかったと思われるのです。



我が家の向いにあった かや葺きの生家
手前は移設後増築された瓦葺きの座敷
(昭和44年時 筆者撮影)

小学校教則綱領第二章第六條（明治十四年五月文部省通達）は高等科の学期を二箇年と定めていました。また明治十八年五月の高等科第四級修業時の國男は入学してまだ半年たらずであり卒業とするには早すぎる時期でした。その後もまだ通学していたのかも知れませんが、当時北条の辺りは國男の言うところの「日本における最後の大飢饉」が発生しており、また父も北條小学校の訓導であり薄給で多くの家族を養い兼ねた為だったのでしょうが、北条に移って一年足らずで、いつしかお寺の小僧話があったりしながらも、同年暮れには國男だけが辻川の大庄屋三木家に預けられる事になるのです。

三木家は蔵書家であったため、部屋に籠って乱読する生活を一年くらい過ごした事が後世に大いに役立つ事となりました。

九代目当主の三木拙二は明治六年（一八七三）生まれで郵便局長や村会議員を務めるなどした人物で、二歳年上でしたが國男とは竹馬の友として生涯に渡り親交を深めました。

その後辻川を離れた國男は明治二十年（一八八七）八月、次兄井上通泰に連れられ北条を後にし、長兄鼎が住んでいる茨城県布川に向かったのであります。

柳田國男新年表（数え年）

明治 八年（1875）

七月三十一日

飾磨縣神東郡辻川村で松岡家 父 操
母 たけ の六男として誕生する

明治十二年（1879）

十月頃

五歳 辻川の昌文小学校入学

明治十五年（1882）

十月

八歳 円乗寺昌文小学校卒業

明治十六年（1883）

四月

九歳 昌文小学校中等科六級卒業

明治十六年（1883）

七月

九歳 昌文小学校中等科新校舍に移転

明治十七年（1884）

十一月

十歳 新昌文小学校卒業中等科卒業
（県令表彰を受ける）

明治十七年（1884）

十二月頃

十歳 自宅を売り払い家族で北条に移転

明治十七年（1884）

十二月又は十八年一月頃

十歳 北條小学校高等科入学

明治十七年（1884）

明治十八年

にかけて悲惨な飢饉を体験する

明治十八年（1885）

五月

十一歳 北條小学校高等科第四級修業

明治十八年（1885）

暮れ

十一歳 辻川の三木家に預けられる

明治十九年（1886）

八月

十三歳 井上通泰（次兄）に付き添われ松岡鼎（長男）の住む茨城県の北相馬郡布川に移転する

明治二十年（1887）

八月

一年位で三木家から北条の自宅に戻る

注一 福崎町史第二卷

田原地区では明治六年二月に五つの小学校が出来ました。

明徳小学校 辻川 辻川237
智泉小学校 大門 薬師寺

金鶏小学校 西光寺 宝性院
柔遠小学校 長目 勅使寺

田原小学校 西野 西源寺
明徳小学校は同年五月東田原一四

六番地に移転し、明治八年には又辻川二三七番地に復した。翌明治九年

に五校が合併したうえで昌文小学校と改称した。

明治十三年に西田原一一九番地に移転したが（*）、明治十六年七月に

西田原字西廣岡九九八に新築移転し、明治二十一年四月昌文小学校を昌文

尋常小学校と改称し、西田原村円乗寺にあるものを昌文簡易小学校と称

したとある。

* 松岡操の教員退職届より昌文小学校は明治九年熊野神社横の円

乗寺にあった可能性が出てきたが、明治十六年新昌文小学校に移るまで円乗寺にあったとす

べ「明治十三年に西田原一一九番地に移転」は無かったのでは

ないかと思う次第です。

注二 田原小学校100周年記念誌

「まなびの郷」

昌文小学校の前身は、円乗寺の寺子屋であると伝え聞いている人があつた。しかし明らかにできなかったとの記載が有る。

又「卒業生」の欄に明治十六年として松岡國男、福渡鶴松、松岡源之助の三名だけを記載しております。

ただし松岡國男、福渡鶴松は明治十五年十月に卒業していたのである。

注三 「石橋の巖橋」

現在、辻川山麓の保存生家近くの河童池に移設保存されている。

注四 神東郡は、明治八年は飾磨縣であったので松岡國男が生まれたのは飾磨縣神東郡辻川村である。

翌九年、兵庫縣となった。

同年、森岡昌純が兵庫縣権令となり、明治十一年（一八七八）県令となる。明治十八年（一八八五）四月七日に交代し、農務省に転じたが即退任し、四月九日には共同運輸会社社長に就任した。

兵庫縣神東郡田原村となったのは明治二十二年のことである。

注五 「北條町志」

博文小学校は間もなく北條小学校と改称された。

明治十五年に工費三千餘圓を以て

酒見寺裏に校舎を新築し初めての學校の形式を整えたのである。

同年小学校を初等中等高等の三階に區分することになったが、……北條は第一学区となったわけである。

注六 小字「掛上がり」カケアガリ

「掛上がり」は馬車道から分かれた北条道沿いの北野地区の小字。松岡家が移築されたのは「掛上がり」隣の大門地区である。

参考文献

福崎町史 第二巻

福崎町史編集専門委員会 著

柳田國男八十八年史 小山清 著

まなびの郷 田原小学校記念誌

北條町志 加西市北條町 著

今、柳田國男を読む 石井正巳 著

民俗学のふるさと 辻川 著

辻川史編集委員会 著

柳田國男と福崎町

東播磨地域史懇話会 著

柳田國男を歩く 井出孫六 著

松岡源之助傳 松岡秀隆 著

故松岡源之助翁追慕記

真弓政久 著

名望家・三木拙二と

日露戦後の農村問題

神戸大学大学院人文学研究科 出水 清之助



はじめに

本稿は、三木家の九代当主・拙二（通精）の名望家としての活動を検討しつつ、その位置づけについて考察するものである。

三木家は、姫路藩主の新田開発の呼びかけに応じて明暦元年（一六五五）に神東郡・辻川に移住し、三代当主・善政の時代から近世を通じて村々を統括する大庄屋を務めた。また、明治初年には八代当主・承太郎（通済）が飾磨県の戸長等を歴任するなど、近代以降も地域社会の中心的存在であった。同家の福崎町における政治的・文化的な影響力の大きさは知られており、現在も残る三木家住宅（西田原）からも、往時の有様をうかがうことができる。

しかしながら、こうした重要な役割を果たした三木家の中でも、近代において長らく当主をつとめた九代・拙二（一八七三―一九六一年）の動向については、大正期以降の農会への関与「深見二〇一」を除けば、本格的な研究がなされていないというのが現状である。

そこで本稿では、拙二についての基礎的な研究として、「名望家」という視角から検討を加える。「名望家」は近代日本において、名声・財産・教養を兼ね備え、地域社会の形成・発展に大きな役割を果たした存在であるが、拙二もこうした名望家として評価できる人物であると思われる。例えば、当時の彼について評した文献によれば、「氏（拙二―筆者註）は郡内に於ける富豪にして、家世々農を以て業とし地方に於て名望最も高し、資性温厚篤実にして夙に農事の改良に志厚く、実践躬行常に郷党の先駆者たり」（多木製肥所編『日本農界偉人名鑑』多木製肥所、一九

一一年、二七・二八頁）とあり、まさしく地域社会の名望家として活躍した人物であったことがうかがえる。ここでは主に三木家に残る史料を用い、その足跡をたどりながら、特に日露戦争後の諸問題に対して、拙二が名望家としてどのように向き合ったのかについて考えてみたい。

なお、史料番号は兵庫県神崎郡福崎町教育委員会編『「兵庫県指定文化財―三木家住宅 文献・民具目録」(一九九九)』による。

一、青年時代の拙二

まずは、拙二の青年期の歩みについて確認する。三木拙二は八代当主・承太郎のもとに明治六年(一八七三)に生まれた。民俗学の父・柳田國男とは二歳違いで、生涯にわたり親交があったとされる。

青年時代の彼の履歴で注目すべきものとしては、二〇歳前後に東京の学校を修了・卒業していることである。明治五年(一八九二)には国語伝習所を修了、翌年には私立日本中学校を卒業している。

私立国語伝習所(東京府神田区猿楽町)は、杉浦銅太郎が明治二一年(一八八八)に設立した大成学館に併設された学校であり、欧化主義への対抗として国語教育の重要性を説

いて、国語・国文の教育を専門としていた。また、私立日本中学校(東京府神田山本町)は、国粹主義者として有名な杉浦重剛が校長をつとめた学校である。

直接的な史料が残っていないため、彼の思想形成についてはなお検討を要するが、上京後の学校選択からは、いずれも国家主義的な色彩を検出できる。当時は、欧米列強との条約改正交渉の中で生じた、内地雑居論に対する尚早論に端を発した運動が盛り上がりを見せていた時期であり、あるいは彼もそうした運動に身を投じていたのかもしれない。詳細は不明だが、こうした東京での生活を経た後、彼は地元に戻り家業に勤しんだようである。

二、名望家と政党

その後、二〇代を通じて地域社会に関わる目立った活動は確認できない。彼の公共的な活動が本格化するのには、主に明治三八年(一九〇五)の日露戦争終了後(三〇歳以降)であり、次に示したように、明治後期(大正・昭和)には福崎町にとどまらず郡・県レベルの名望家として活躍している。



三木拙二
(明治43年 37歳)

明治三八年「三二歳」：

神崎郡農会評議員に選任

明治四〇年「三四歳」：

県農会で神崎郡農会代表者に推挙

大正五年「四三歳」：

県農会より名誉会員に推薦される

大正九年「四七歳」：

株式会社中播銀行取締役就任

大正一〇年「四八歳」

神崎郡農会長に当選

大正一一年「四九歳」：

辻川郵便局長を拝命

大正一四年「五二歳」：

煙草耕作組合長に当選

彼の名望家としての来歴で特徴的なのは、政党運動への関与が稀薄なことである。ここでは比較対象として、神東郡の内藤利八を挙げつつ、名望家と政党との関係について説明しておきたい。

安政三年(一八五六)に神東郡川

辺村(現市川町)に生まれた内藤は、

明治六年(一八七三)に居村の戸長

に一八歳で就任し、その後も明治一四年(一八八一)以降、県会議員を

歴任し、県会の要職である常置委員・県会議長にも選出されている。さらに、明治二三年(一八九〇)の第一回衆議院議員総選挙で当選(以降、当選五回)し、立憲改進黨・国民党の党员・代議士として政治運動に従事した。このように内藤は政党とも関係の深い名望家として、播但鉄道の敷設に尽力するなど地域社会の発展に貢献していた(山内青溪編『兵庫県人物列伝』我觀社、一九一四年)。

日本近代史研究では、このような政党と名望家の結びつきは、以下に見るように日清戦後に形成されることを明らかにしてきた(有泉一九八〇)。日清戦後になると、国・地方の双方で、治水設備、道路、鉄道、高等教育機関を中心に、各種の基礎的なインフラの整備が急がれつつあった。この産業革命・資本主義化の波を「党勢拡張」の好機と捉えたのが自由党であった。同党はそれまで節税を中心とする民力休養路線を掲げ、増税により財政支出を拡大しようとする藩閥政府に対峙してきた。ところが、日清戦後の明治三三年(一八九九)になると、自由党の後継にあたる憲政党は、地租の増徴に同意し、藩閥政府と手を結んで、予算をインフラ整備等に投じる「積極主義」へ転換していく。

政党はこうした増税を受け入れる見返りとして、インフラ整備等の公共事業の予算を獲得し、それらを「土産」に、自分たちの支持基盤の「地方」に「利益」撒布することで勢力を拡大していったのである。このようない「地方利益誘導型政治」が定着するに伴い、地域の発展を望む農村の名望家層は、政党のもとに組織されていく傾向にあったとされる〔季武二〇一五〕。

ここで指摘しておきたいのは、彼の来歴からもわかるように、拙二は資本主義化の波に乗り、政党と結びつきつつ地域社会を発展させるタイプの名望家とは異なっていた可能性があるということである。では、彼はどのような形で地域社会と向き合ったのだろうか。

三、日露戦争後の諸問題

次に名望家としての拙二が登場する日露戦争後の社会が抱えた問題について概観しておく。

当該期に顕著になったのは、急速な資本主義社会の進展がもたらした衝撃であり、特に「地方」（農村部）における「社会的紐帯」の解体であった。当時、農政官僚であった柳田國男も一九〇〇年代初頭に産業組合の意義を説いて「我国の如く数百

年の間養成せられて而も漸々廢弛せんとする郷党の結合心」を「快復」するための好手段であると主張（『柳田國男全集』（第一巻、筑摩書房、九六頁）した。資本主義社会の到来は、従来の農村の秩序を解体しつつあったのである。

特に問題となったのは、農村の経済格差の進行に伴う地主と小作人の対立であった〔稲永二〇一六〕。当時の内務官僚が観察したところによれば、明治前期の地主は、自らも生産者であると同時に農村の経営者であり、村落共同体秩序の存立に対しても関心を向け、村落住民の永安に責任を感じることもあったとされる。しかしながら、資本主義社会の進展に伴い、明治後期から地方農村には小作料の取得と米価の相場に関心を集中させる不在地主（いわゆる寄生地主）が増加しはじめ、村落共同体における秩序構造は漸進的に変容した。加えて、日露戦後には中小自作農が土地を失い小作貧農に没落する社会現象も多くみられた。

四、産米改良問題について

当時の兵庫県では、こうした資本

主義社会の進展に起因する問題に加えて、産米をめぐる問題も顕在化していた〔兵庫県一九六七〕。明治四〇年頃、兵庫県の産米は二〇〇万石をこえていたが、乾燥調製・俵装・貯蔵等の問題で品質の悪い米が含まれ、市場で高値がつかず、防長米・大分米・備前米などに圧倒されつつあった。そのため、早くから米穀検査の必要性が叫ばれ、明治三九年（一九〇六）二月には県農会が総会で産米検査の実施を決議し知事に建議している。こうした動きに込めるよう

に、県では同年一〇月に米穀の乾燥を十分にし、調製を完全に、俵装を堅固に、容量を一定にするように告諭した（手島康夫編『兵庫県米穀検査満十五年記念誌』兵庫県米穀検査満十五年記念祝賀会、一九二三年、八四・八五頁）。

神崎郡においても、「戦後之経営として国本培養に切なる時に方り仮令一粒の微と雖も空しく脱漏虫蝕腐敗せしむるに忍びんや、茲に於て郡内有志等産米改良の将来大に必要を感じし前川郡長に種々協議する所ありたり」（『神崎郡産米改良会報告書』、三木家史料・近代二・一二）。

産米改良会に関する記述は、特に断らない限り同史料に基づく）というように、日露戦後経営の問題と絡め

ながら産米の問題が認識され、郡内の有志と前川萬吉郡長の間で協議がなされた。

明治四〇年（一九〇七）二月二六日には各村長が会同し、神崎郡の産米改良に関し、前川郡長より産米改良会の創立について諮問がなされている。その場では、各村の大地主より三名乃至五名の委員を選定し、来る三月上旬に郡役所樓上に集まって、創立方法を協議するということが決定された。

そして、その協議の結果、「産米改良会」を創立すること、各村大字及び最寄りより一名乃至二名の大地主を創立委員として選定することとなり、一五五名の創立委員のもと同年五月二三日、神崎郡役所において産米改良会創立総会が開催された。この産米改良会の事業の一つは、小作米品評会を開設することであった。産米の品質改良は地主にとって大きな利益が見込まれたが、小作人にとっては余計な労力が増えるに過ぎない。小作人品評会は優秀な成績を収めた小作人に荣誉と多少の経済的見返りを付与することで、産米改良に向けた小作人の協力を引き出すものとするものである。

この産米改良会の創立総会では、役員を選出が行われているが、会長

には鶴野金平（栗賀村）、副会長には三木拙二（田原村）がそれぞれ選ばれている。また、総会では「兵庫県地主大会出席員之件」についても議論され、会長・副会長の派遣を決定した。この地主大会とは同年五月二五日に明石郡役所で開催された県下各郡市の連合地主会のことであり、県庁より不破事務官、森田農務掛長、前瀧技師、農事試験場より小野、居田両技師、その他伊藤長次郎、農長、各郡長及び代表者等百余名が出席した大規模な会合であった。

この会合にあたっては、主に米穀改良方法について議論がなされ、同業組合法ではなく、県令発布をもって実行する旨が確認されている（『神戸又新日報』明治四〇年五月二八日付「雑報」）。この地主たちの働きかけもあり、明治四一年（一九〇八）一月三十一日には念願の「米穀検査規則」が発布された。

その後も神崎郡の産米改良会は活動を続け、明治四〇年一月一二日の評議員会では、産米改良につき、その準備及び施行方法等の実況視察のため、視察員の派遣を決定した。三重・滋賀県米穀検査視察員には鶴野金平（会長）と牛尾丑吉（神崎郡農業技師）が、岡山県米穀検査視察員には三木拙二（副会長）と松岡栄

太郎（神崎郡農会幹事）が選ばれた。

このように、日露戦争後の兵庫県では産米改良・米穀検査の実施が問題となっており、神崎郡でも大地主による産米改良会が設けられていた。三木拙二は県レベルの会合にも出張するなど、この問題の解決に向けた一連の動きの中心的な存在として活躍したといえる。ここからは、特産物である米の品質改良から経済的な利益を高め、農村社会を立て直そうという彼の姿勢を指摘できるだろう。

五、尊農協会の設立

先述の通り、米穀検査規則は発布されたが、産米改良・米穀検査には小作人の協力が必要不可欠であった。産米改良は、場合によっては地主と小作人の対立を深め、農村の「社会的紐帯」の崩壊を促進させてしまう危険性を内包していた。また、より効果的に実施するには、各郡市ではなく全県を単位に統一的に取り組まれる必要があった。こうした状況で、県農会長の伊藤長次郎らを中心に県内の大地主の団結が図られていく。

五代目・伊藤長次郎は、明治六年（一八七三）に兵庫県今市村（現高砂市）に生まれた。旧制姫路中学を卒業後、東京に遊学し、英語や法律などを学んだ後、先代の病気を機に

帰郷し、明治二八年（一八九五）に

家督を相続した。大正一三年（一九二四）の調査によれば、伊藤家は印南郡・加古郡を中心に計三二三町歩の土地を所有し、関係小作人数は一五五〇人を抱える県下有数の大地主であった（「庄司二〇〇三」）。長次郎と拙二は同い年であり、三木家に残る史料からは、二人は親しい関係にあったことが推察される。活躍し始めた時期も被っており、長次郎は、明治末から大正中期にかけて、県農会長、信用組合連合会会長をつとめるなど県農業界の重鎮として活動した。

伊藤長次郎は国家公共に対する地主の規範・責任意識を有し、「地主と小作の共同一致」による農事改良を強く主張していたが、そうした彼を中心に結成されたのが大地主会である尊農協会である。

兵庫県では、明治四一年（一九〇八）八月一日〜三日にかけて明石で第二回報徳会夏季講習会を開催する予定だったが、それに先立つ七月に伊藤ら大地主一四名は連名で尊農協会設立に関する通知を出している（「三木家史料・近代一・キ・八一〜」）。神崎郡からは産米改良会会長の鶴野金平と副会長の三木拙二の二人が発起人に名を連ねた。以下、少し長くなるが主要な部分を引用する。

「：近時事業ノ何タルヲ問ハズ競フテ之ガ改良發達ニ力ヲ致シ、我農業界ニ於テモ亦種々ナル方法ニ依リ多年孜々トシテ改良普及ノ途ヲ講究スルニ勉メタル結果、其効績ヲ挙ゲシ事項多々有之候へ共、地方ニ依リ地主ト小作人トノ円満ヲ欠キ、為メニ斯業改善ニ障碍ヲ来タスガ如キ感有之候、畢竟スルニ未ダ県下ノ大地主会同シテ交情ヲ温ムルト共ニ、農事ノ改良上相互ノ意見ヲ吐露スルノ機会ナキニ依ルコト、存ジ、実ニ遺憾トスル所ニ有之候、幸ニ今回前陳ノ開会ヲ見ルハ御同様ノ光栄トスル所ニ御座候、就テハ此機ヲ逸セズ前条ノ目的ヲ達センガ為メ兵庫尊農協会ナルモノヲ組織シ、遺憾ナキ様致度：」

ここでは、近時は農事改良の功績を挙げているが、地主と小作人が円満を欠いているがゆえに行き詰まりの感があり、それは大地主間の交流・意見交換の機会がないことによると主張されている。尊農協会はかかる現状を打破するために大地主の組織化を呼びかけた。

「兵庫尊農協会々則」によれば、尊農協会の趣旨目的は「本会ハ農事ノ進歩發達ヲ図ルヲ以テ目的トス」（第一章第一条）であり、その構成員は「地価一万円以上ヲ有スルモノ

若クハ農事上相当ノ地位経歴ヲ有スルモノ」(第二章第二条)とされる。さらに、主な事業としては「①會員相互ノ交情ヲ温メ意見ノ交換ヲナスコト、②小作人擁護ノ途ヲ講究スルコト、③農村ノ幸福増進ノ途ヲ講究スルコト、④農村ノ繁栄策ヲ講究スルコト、⑤風紀ノ改善及勤儉貯蓄ノ途ヲ講究スルコト」、など農村再建に関わる五項目が掲げられている。総じて、尊農協会は県内の大地主の結集を図って、日露戦争後の地方農村が直面していた問題の解決を志向する団体であったといえる。

八月二日には発会式が執り行われ、会長には伊藤長次郎(印南郡)、副会長(二名)には蓬萊林太郎(加東郡)と奥藤研造(赤穂郡)、評議員(一〇名)には賀集新九郎(三原郡)・川口木七郎(飾磨郡)・大西甚二平(印南郡)・日下安左衛門(朝来郡)・志水市郎平(宍粟郡)・波部元次郎(多紀郡)・堀謙二郎(揖保郡)・鎌田三郎兵衛(養父郡)・三木拙二(神崎郡)・平尾源太郎(出石郡)が選出された(坪井忍編『明石講演集』報徳会、一九〇九年、一三頁)。当時県内には地価一万円以上の大地主は四〇〇名ほど存在していたとされるが、彼ら役員はまさにその中心的な人々であり、三木拙二もその一人であ

った。三木家は明治中期段階で西田原村に三一町二反一九歩の土地を所有し、明治三十一年(一八九九)には一六三人の小作人に土地を貸し付ける地主であった「福崎町一九九五年」。拙二自身にとつても、大地主の団結や小作人との関係形成は切実な問題であったと思われる。

これら大地主は県からも期待された存在であった。農事試験場長の小野孫三郎は、県や郡・町村には農事改良の機関が備わっているが、小作人たちはそれらを十分に利用する能力・金力に乏しいため、中間に立つて技術者を動かし小作人を助ける、地主の活動が必要であるとする。特に率先して各地主を動かす大地主の存在は重要であるとの見解を述べている(内務省地方局編纂『地方改良事業講演集』下、内務省地方局、一九〇九年、五六八〜五六九頁)。この県からの期待感は、逆に言えば、現状の地方農村が抱える問題は、彼ら大地主が率先して行動しなければ解決できない性質のものであったと捉えることもできるだろう。

おわりに

以上、検討してきた通り、三木拙二は地域社会の名望家として日露戦争後の地方農村の抱えた諸問題の解

決に取り組んだ。当時の兵庫県では農事改良を通じた農村の立て直しが図られていたが、三木拙二は伊藤長次郎ら県内有数の大地主らとともに、積極的に問題の解決に尽力している。農村問題については、明治四二年(一九〇九)以降に内務省主導で展開される地方改良運動においても引き続き取り組まれるが、拙二は神崎郡青年会の顧問をつとめるなど、同運動に関与しており、県や国家の期待にこたえる立場は共通して確認できる。

本稿では、拙二の名望家としての特徴について、政党との直接的な結びつきがあまり確認できないという点から説明を試みた。彼にとつては、政党の供与する「地方利益」(＝利益撒布による地域の経済発展)よりも、農村の秩序構築(再建)を目指す明治政府側の構想に親近感があったように思われる。その明確な理由にはわからないが、彼が行動を共にした伊藤長次郎が「国家公共に対する地主の規範・責任意識」を備えていたように、あるいは大地主特有の意識が名望家としての拙二の行動を規定していたのかもしれない。名望家としての拙二の位置づけについては、当該期に県内の大地主が果たした役割を検討することで、より深く理解することができよう。この点は、

彼の内面や県内の大地主たちとの交友関係などから、さらなる検証が必要であり、今後の課題としたい。



三木拙二
(昭和28年 81歳)

【参考文献】

- ・兵庫県史編集委員会編『兵庫県百年史』(兵庫県、一九六七年)
- ・有泉貞夫『明治政治史の基礎過程』(吉川弘文館、一九八〇年)
- ・福崎町史編集専門委員会編『福崎町史』第二卷・本文編二(福崎町、一九九五年)
- ・庄司俊作『近代日本の農村―農政の原点をさぐる』(吉川弘文館、二〇〇三年)
- ・深見貴成『三木拙二と神崎郡農会』(『神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター平成二二年度活動報告書』二〇一一年)
- ・季武嘉也『政党の発展と地方の系列化』(同編『日本の近代』放送大学出版会、二〇一五年)
- ・稲永祐介『憲政自治と中間団体―木喜徳郎の道義的共同体論』(吉田書店、二〇一六年)

第十三回福崎町柳田國男ふるさと賞 小学生低中学年の部 受賞

田の水はどこから？

田原小学校三年 能瀬夏葵



わたしの家は西光寺の高い所にあります。家の回りはおじいちゃんの田です。おじいちゃんは、田の水の世話をしています。わたしは家の近くの池から水がくると思っていました。でも、どうして池に多く水がたまっているのかふしぎです。おじいちゃんに水はどこから流れて池に入るのか聞きました。

◆調べたこと・わかったこと

1. おじいちゃんの田は桜池の水を使っている。桜池の水は、市川町瀬加の岡部川からきている。
2. わたしは岡部川の上流笠形山のふもとから水の流れを見てきた。瀬加の瓜生田の取水口から水をもっている。



西光寺野疏水路図
(流域面積)

3. と中に山があるので、いくつかのトンネルをほって水をおくっている。とくに落合から北野までのトンネルは、長さが五百mほどあるらしい。工事は明治、大正の時代に行われたとおじいちゃんに教えてもらった。昔の人は今のよう大きなきかきもないので大変な苦労をしたと思った。



令和6年9月3日
世界かんがい施設遺産登録

4. この水路が「世界かんがい施設遺産登録」に選ばれた。すごい！

柳田國男ふるさと賞

福崎町が生誕の柳田國男先生は生前、「日本人とは何か」という問いの答えを求め、日本列島各地に赴き、その地の民間伝承等を調査、研究され、日本民俗学の確立に貢献されました。

その先生の功績を称え、町では小中学生に、より深く民俗学を学んでもらおうと平成25年度から「福崎町柳田國男ふるさと賞」を創設しました。

このふるさと賞は、夏期休暇などを利用し、自ら、郷土の歴史やそこに伝わる伝説・習俗などを調査、研究し、まとめられた作品の中から優れたものに贈られます。

今までの作品をみますと、今、調べて残しておかないといずれ忘れられてしまうだろうと思われる貴重な作品がたくさんあるのに驚かされます。

第2の柳田國男が誕生することを願い、郷土に愛着と誇りを持つる子どもに育ってほしいと創設した賞ですが、その副産物として、多くの作品が町の貴重な資料になっています。

このふるさと賞に参加いただいた皆さんに感謝を申し上げます。ともに、引き続き柳田國男ふるさと賞への応募をお待ちしております。

笠形山などにふり、大雨が岡部川に流れこむ。



瓜生田取水口から水路になる。

瓜生田



そしてトンネルに水が入っていく。



水路幅は 2m50cm

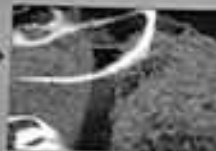
トンネルがいくつもある。

透谷の山の中



1番長いトンネル (500m)

死野の出口



さらに大門を横切る。



ここから西光寺の水



水路幅 1m50



水門池入口。

水路がせまくな。アくる。



水門のカギをおいちゃんが開け閉めしている。

公民館跡



水路幅 40cm



←おいちゃんの田

おいちゃんの田

第十三回福崎町柳田國男ふるさと賞 小学生高学年の部 受賞

八千種小学校鼓笛隊63年の歴史

—13人の方にインタビューしました—

八千種小学校五年 岡 本 拓 実



◆調べようと思ったきっかけ

運動会するとき、「鼓笛は今年で63年目です。」というアナウンスを聞いて、「過去の鼓笛はどんななんだっただらう?」、「昔と今でちがうことはたくさんあるのかな?」と疑問に思い、調べることにしました。まず、鼓笛の歴史について調べました。

それから、いろいろな年代の方にインタビューをして話を聞きました。



◆鼓笛の歴史

昭和37年度鼓笛隊結成

「ドラムを入れて行進させたら、音楽的にも体育的にも良く、団体意識を育てる上にも役立つのではないか」という山口校長先生の熱意から結成されました。

育友会（PTA）に最小限必要な楽器をこう入してもらい、10月の運動会を目指して練習を始めました。

指き、大太鼓、中太鼓、小太鼓、シンバル、ベルリラ、スペリオパイプがあり、5・6年生で一組、3・4年生で一組の二組で構成されていました。



鼓笛隊生みの親、山口校長先生

昭和38年度

農協から鼓笛用大太鼓、中太鼓、小太鼓とブルーのベレーぼう、ネクタイ130名分を寄付してもらいました。

交通安全パレードと公明選挙けい発に参加

昭和41年度

交通安全鼓笛隊パレードで校区内を巡回

昭和45年度

ボーイスカウト神崎第一団発会式に参加

昭和49年度

日米親ゼン少年じゅう道大会に参加

昭和55年度

西ばんふるさとまつりに参加

◆74さい N・Tさん(鼓笛隊初代) 学年の組み合わせ

5・6年生 合計137人

服そう

体そう服がなかったので、男子は私服の半ズボンと赤白ぼう、女子は私服のブルマにはちまきをした。

楽器の種類

指き者、副指き者、大太鼓、中太鼓、小太鼓、ベルリラ(たて向きの鉄きん)、シンバル、スペリオパイプ(6年生が大きな楽器をしていた)

そうです)

していた曲

いかりを上げて、見よ勇者は帰るなど

えんそうしているときの隊形

4列じゅう隊

出えんした地いきの行事

八千種と大ぬきで交通安全パレード、福崎小学校でもえんそう指導していただいた先生

鎌谷先生、村田先生、奥平先生、和田先生

えんそうした楽器

スペリオパイプ(スペリオパイプはリコーダーに似ていて、指使いが同じだそうです)



練習時の風景

えんそうした楽器の感想

むずかしくはない
印象に残っていること

楽ふを覚えるのが大変だった。

びっくりポイント!

・体そう服がなかったこととびっくり!

・スペリオパイフという楽器があるのを初めて知ってびっくり!
 ・今もしている「いかりを上げて」を、鼓笛隊1年目からしてびっくり!

◆69さい N・Hさん
 学年の組み合わせ

4・5・6年生 合計177人

服そう

体そう服、ベレーぼう、スカーフ

楽器の種類

指き者、副指き者、大太鼓、中太鼓、小太鼓、ベルリラ、シンバル、リコーダー(児童の人数が多いので、副指き者は4人いたそうです)
 していた曲

ちようちよ、いかりを上げて、校歌、ドラムマーチ、太平洋行進曲、富士山

えんそうしているときの隊形

円じん、クロス、風車

5列から3列になったりした。

(指き者は朝礼台の辺りに立ち、副指き者は移動の中心になっていた)

出えんした地いきの行事

ない

指導していただいた先生

高岡先生

えんそうした楽器

リコーダー(4・5年生) 副指き者(6年生)

えんそうした楽器の感想

あまりない

印象に残っていること

隊形移動でぶつからないようにするのがむずかしかった。

順番を覚えるのがむずかしかった。

びっくりポイント!

・先生が児童の楽器を決めていたそうです。今は自分の希望を言えるのでびっくり!



◆66さい O・Mさん
 学年の組み合わせ

4・5・6年生 合計159人

服そう

体そう服、ベレーぼう、スカーフ

(修学旅行にもベレーぼうをかぶって行ったそうです)

楽器の種類

指き者、副指き者、大太鼓、中太鼓、小太鼓、ベルリラ(ベルリラは

女子に人気があったそうです)、シンバル、リコーダー

ンバル、リコーダー
 していた曲

いかりを上げて、校歌、富士山、木曾節

えんそうしているときの隊形

富士山(中央に指き者、その横に大きな楽器がならび、富士山のすそ野になるにつれてリコーダーの人がひざまづいたり、ね転がったりしてふいていたそうです)

出えんした地いきの行事

庄に信号機が出来たお祝いのパレード(新聞にのったそうです)

指導していただいた先生

藤川先生

えんそうした楽器

リコーダー

えんそうした楽器の感想

ない

印象に残っていること

みんなで力を合わせて一つになって感動した。

びっくりポイント!

・富士山を立体的に表してびっくり!

・修学旅行にもベレーぼうをかぶって行ったことにびっくり!

◆50代 Sさん
 学年の組み合わせ

4・5・6年生 合計151人

服そう

体そう服、ベレーぼう、スカーフ、青いばんばんがついた白のハイソックス

楽器の種類

指き者、副指き者(児童長が指き者、副児童長が副指き者をしていたそうです)、大太鼓、中太鼓、小太鼓、ベルリラ、シンバル、リコーダー、鍵盤ハーモニカ(資料によると校旗を持つ旗手とバントントワラーがいたそうです)

していた曲

こきりこ節(ステップをふみながらえんそうしていたそうです)、いかりを上げて、校歌、富士山など8曲以上

えんそうしているときの隊形

富士山、4列じゆう隊

出えんした地いきの行事

校区外であった何かのイベント

指導していただいた先生

塚本先生

えんそうした楽器

リコーダー(4・5年生)、小太鼓(6年生)

えんそうした楽器の感想

きんちようしたけれど、達成感があつた。

印象に残っていること

印象に残っていること

音を合わせたり足を合わせたりしたのが大変だった。

びっくりポイント!

・旗手とバトントワラーがいたことにびっくり!

◆51さい S・Hさん

学年の組み合わせ

4・5・6年生 合計168人

服そう

体そう服、ベレーぼう、スカーフ、青いぼんぼんがついた白のハイソックス

楽器の種類

指き者、副指き者、大太鼓、中太鼓、小太鼓、ベルリラ、シンバル、リコーダー、鍵盤ハーモニカ

していた曲

こきりこ節、いかりを上げて、校歌、ドラムマーチ、富士山

えんそうしているときの隊形

風車、富士山、4列じゅう隊

出えんした地いきの行事

秋にある産業祭

指導していただいた先生

塚本先生

えんそうした楽器

小太鼓(6年生)

えんそうした楽器の感想

たたくのがむずかしかったけれど楽しかった。

たすぎがけのベルトだったので歩くたびに小太鼓が足に当たっていたかった。

印象に残っていること

先生に「みんなの前で見本をして」と言われてしたけど、上手くいかなくてはずかしかった。

びっくりポイント!

・小太鼓がたすぎがけで不安定だったことにびっくり!

◆48さい Tさん

学年の組み合わせ

4・5・6年生 合計131人

服そう

体そう服、ベレーぼう、スカーフ、青いぼんぼんがついた白のハイソックス

楽器の種類

指き者、副指き者、大太鼓、中太鼓、小太鼓、シンバル(分らない)、リコーダー

していた曲

きらきら星、こきりこ節、いかりを上げて、校歌、ドラムマーチ、富士山

えんそうしているときの隊形

円じん

出えんした地いきの行事

秋にある産業祭

指導していただいた先生

塚本先生、牧田先生

えんそうした楽器

リコーダー

えんそうした楽器の感想

ない

印象に残っていること

夏休み学校へ行って練習をして大変だった。

先生に手足をそろえるよう、きびしく指導された。

びっくりポイント!

・ベルリラと鍵盤ハーモニカがなかったことにびっくり!どうしてだろう?

◆47さい O・Kさん

学年の組み合わせ

4・5・6年生 合計142人

服そう

体そう服、ベレーぼう、スカーフ、青いぼんぼんがついた白のハイソックス(指き者と副指き者は、赤のベレーぼう、赤のスカーフ、白の手ぶくろをつけていたそうです。今と同じです!)

楽器の種類

指き者、副指き者、大太鼓、中太鼓、小太鼓、シンバル(分らない)、リコーダー

していた曲

いかりを上げて、校歌、ドラムマーチなど

えんそうしているときの隊形

4列じゅう隊

出えんした地いきの行事

覚えていない

指導していただいた先生

牧田先生

えんそうした楽器

小太鼓

えんそうした楽器の感想

ななめがけだから足に当たっていたかった。

印象に残っていること

オーデイションがあつて、合格したからうれしかった。

びっくりポイント!

・鼓笛の鼓は太鼓、笛はリコーダーを表しているから他の楽器はいらないと先生があっしやって、ベルリラと鍵盤ハーモニカはなくなっただそうです。びっくり!

◆39さい N・Kさん
学年の組み合わせ

4・5・6年生 合計124人

服そう

体そう服、ベレーぼう、スカーフ、青いぼんぼんがついた白のハイソックス

楽器の種類

指き者、副指き者、大太鼓、中太鼓、小太鼓、シンバル、リコーダー、トリオ（このときからトリオがあった）、鍵盤ハーモニカ（分らない）
していた曲

きらきら星、校歌、ドラムマーチ、負けないで、TOMORROW
えんそうしているときの隊形

円じん、風車、5列じゅう隊

出えんした地いきの行事

田原小学校でのイベント

指導していただいた先生

牧田先生、高岡先生、三輪先生（ぼくの知っている先生がいた）

えんそうした楽器

リコーダー

えんそうした楽器の感想

楽ふを覚えるのが大変だった。

印象に残っていること

田原小学校でのイベントがいい思い出だった。



びっくりポイント！

・ほくの知っている先生が教えていたということにびっくり！
・鼓笛隊1年目から続いていると思っていかりを上げてがなくなっていることにびっくり！

していた曲

きらきら星、校歌、ドラムマーチ、ハイ・ホー、星に願いを

えんそうしているときの隊形

円じん、クロス、風車、4列じゅう隊

出えんした地いきの行事

ない

指導していただいた先生

三輪先生、若畑先生（ぼくが今鼓笛を教えてもらっている先生です。）

えんそうした楽器

リコーダー（4年生）、鍵盤ハーモニカ（6年生）

えんそうした楽器の感想

リコーダーが苦手だったから、鍵盤ハーモニカになってよかった。

印象に残っていること

先生がとった動画を見て、「隊形移動するときにみまわっている。」と言われ、みんなに合わせるのが大変だった。

びっくりポイント！

・今ぼくが教えてもらっている先生がこの時も教えているということにびっくり！

4・5・6年生合計93人
服そう

体そう服、ベレーぼう、スカーフ、青いぼんぼんがついた白のハイソックス

楽器の種類

指き者、大太鼓、中太鼓、小太鼓、鉄きん、シンバル、リコーダー、トリオ、鍵盤ハーモニカ、キーボード（鉄きんなどの打楽器は隊形移動せずに定位置でえんそうしていました）
していた曲

さんぽ、いかりを上げて、校歌、オーラリー、もののけひめ、パフ、きみをのせて
えんそうしているときの隊形

円じん、クロス、4列じゅう隊

出えんした地いきの行事

ない

指導していただいた先生

大葉先生

えんそうした楽器

リコーダー（4年生）、小太鼓（5年生）鉄きん（6年生）

えんそうした楽器の感想

むずかしかった。

印象に残っていること

楽しかった。

◆37さい U・Sさん
学年の組み合わせ

4・5・6年生 合計135人

服装

体そう服、ベレーぼう、スカーフ、青いぼんぼんがついた白のハイソックス

楽器の種類

指き者、副指き者、大太鼓、中太鼓、小太鼓、シンバル、リコーダー、トリオ、鍵盤ハーモニカ

◆27さい S・Yさん
学年の組み合わせ

えんそうした楽器の感想

きんちようした。

みんなをまとめるのがむずかしかった。

せが低かったので、指きほうを大きくふらないといけないから大変だったし、右うでがいたくなかった。

印象に残っていること

コロナの時期で引きつぎがなかったし、フェイスシールドをしていたから大変だった。

一定のリズム（120のテンポ）が取れなくておこられた。

びっくりポイント！

・ 鼓笛は今まで午後の一番組にえんそうしていたけれどコロナのため運動会が午前だけになり、午前一番組の入場行進でえんそうすることになりました。びっくり！

◆分かったこと

- ・ 神崎郡内でも数少ない伝統ある鼓笛隊であること。
- ・ 1年目は137人いたけど、今では58人に減っていること。
- ・ 2年目から今と同じブルーのベレーぼうがあったこと。
- ・ スペリオパイプという楽器があったこと、副指き者がいたこと。

- ・ 今もしている「いかりを上げて」が鼓笛隊1年目からえんそうされていること。（と中えんそうされていない時期があった）
- ・ 富士山などいろいろな隊形をしていたこと。
- ・ パレードなど地いきの行事に参加していたこと。
- ・ 夏休みに学校へ行って練習していたこと。など



◆感想

自由研究でたくさんの方にインタビューするのは初めてだったので、とてもきんちようしました。でも、今までの鼓笛の歴史について知ることができたし、インタビュで「リーダーは人数が多いからふくふりをしていただけ」という話など、いろいろ聞けて面白かったです。

また、昔は地いきの行事に出ていると知り、「せっかく練習してきたから、ほくも行事に出てみたい。」と思いました。それから、昔は8曲か6曲などたくさんえんそうしていたのですが、今は「いかりを上げて」と「校歌」の2曲だけなので、あと1曲くらい増やしたいと思いました。

今では58人と人数が少なくなったけど、鼓笛隊が63年続いてきたことはすごいことだと思うし、集団の一員としてのきん張感やにんたい力が育つと思うので、これからも鼓笛隊が続けばいいなと思いました。

◆参考にしたもの

そう立百周年記念し

※鼓笛隊の人数は卒業生の人数から計算しています。少しご差があるかもしれません。

◆お礼の言葉

インタビューでは一人30分ほど時間を取っていただきました。鼓笛について前もって調べてくださったり、卒業アルバムを持ってきてくださったり、一生けんめい思い出そうとしてくださったり、鼓笛についてよく知っている方をしようかいてくださったりしました。

ありがとうございました!!



みなさんのやさしさにふれることができて、心がとても温かくなりました。インタビュに協力してくださったみなさん、おいそがしい中、本当にありがとうございました!!

第十三回福崎町柳田國男ふるさと賞 中学生の部受賞

結婚式のころりからりて

福崎東中学校一年 井藤 咲江



●動機

大河ドラマを見たり、最近のドラマを見たりしていると、結婚式のシーンが出てくることがあります。すると、結婚式のかたちが全然ちがうことにびっくりします。そこで、この機会に結婚式の移り変わりを調べ、そこから時代の変化を見つめたいと思いました。また、今を生きる私たちの結婚への価値観も探ってみました。

●結婚式の移り変わり

日本の結婚の歴史をまずは調べました。

(参考文献：<https://bridal-oshigoto.com>)

◆古代

古代の日本人は性に対しておおらかで開放的であり、恋愛と結婚の境は明確ではなく特別な儀礼も行われていませんでした。結婚に近いものといえば、男性が夜に女性の所に忍び込み、探し当て、相手が許せばOKという「妻問婚」がありました。

〈古事記より〉

七十二年に完成した日本最古の歴史書『古事記』の中に日本の誕生はイザナギノミコトとイザナミノミコトの結婚によるところから始まるそうです。天之御柱をイザナギが左から、イザナミが右から回って結ばれたとされ、それが結婚の起源とされています。

そういえば、おひな様もおだり様が左、おひな様が右にかざります。結婚式の席も左が新郎で右が新婦なのは、こんなところから由来があるのかもしれないと思いました。

◆平安時代（8～12世紀）

自由恋愛の「妻問婚」から女性の親が婿を決定する「婿取婚」へ変わります。貴族社会では男性の忍び通いが三晩続くと結婚の意思があるとみなされ、三日目の夜には餅を食べべて祝う「三日夜の餅の儀」が行われました。夜が明けると「ところあらわし」と呼ばれる祝宴が催され、これをもって結婚の成立とされています。

〈引き出物の由来〉

引き出物の語源は「引き出す」で、このころに祝宴に招いた客に、帰りに馬を引き出して贈ったことが始まりとされています。

貴族の人は祝宴を行っていたけれど、おそらく一般の人はそんなことはしていません。

◆鎌倉・室町時代（12～16世紀）

封建的な父権優先型の社会になり、男性の家に女性を迎え入れる「嫁取婚」が広まりました。女性は生家を離れ男性の家に入るといって、近代の結婚に近い形が生まれました。結婚にまつわる儀礼（盃事、祈禱、親戚や知人を招く祝宴）が始まります。

〈結納の起源〉

婚約の儀式である結納は「納采」と呼ばれ、皇室の儀式からきています。

男性が女性より上になっっているような気がしました。ふわっとしていた結婚が儀式のようになってきています。

〈三献の偽〉

約束を固めるための杯をとりかわして、出席者全員が注がれた酒を飲んでいました。三献とは、一献につき大、中、小の杯で一杯ずつ酒をすすめ、二献、三献と全部で9杯の酒を飲む儀礼のことです。酒の肴がある時は、一献↓打ちあわび、二献↓かち栗、三献↓昆布でした。現代でも神前式で行われる三三九度は、これが由来しているそうです。

◆江戸時代（17～19世紀）

庶民の中でも見合いや結婚の儀礼が行われ始めます。武士は親が相手を選び、町人は見合いをして縁組みをしていました。子供のうちから親同士が婚約を結ぶ許嫁の風習があったのもこの時代です。

〈輿入れ〉

嫁の乗った輿を婿の家に担ぎ入れ

る「輿入れ」が儀式の大事な要素となっていてきました。武家や裕福な商家などでは、着飾った花嫁とともに多くの嫁入り道具を行列して運び込む「嫁入り行列」が華やかに行われるようになつてきました。豪華絢爛な嫁入り行列として有名になるのは、一六二〇年（元和6年）に行われた2代将軍秀忠の娘和子の皇室への嫁入り（入内の儀）で、和子は豪華な牛車ぎゅうしゃに乗り、諸大名や公家も参列したそうです。花嫁道具を運ぶだけでも数千人を連ねる大行列であったといわれています。

〈江戸庶民の結婚式〉

裕福な商家などでは花嫁は振袖や留袖、花婿は紋付羽織袴を着用し嫁入り行列なども行われるようになりましたが、江戸庶民の場合は店請人たなうけにんつまり借家の保証人などに仲人を頼み、形だけの三三九度をすませて料理と酒で祝うという簡素な婚礼が多くみられるそうです。特別な衣装ではなく、普段着で行われることも多かったといえます。

〈婚礼衣装〉

江戸中期以降の武家の花嫁は、白無垢むくを着て、髪は文金高島田ぶんきんたかしまだに結び、綿帽子をかぶるのが一般的でした。白無垢とは打掛、帯、綿帽子をはじめ、下着から小物まですべて白一色

に統一したもののことです。文金高島田は、男性に流行していた分金風の髪型を女性向けに優美にアレンジしたものだそうです。元文年間（一七三六〜四〇）に鑄造された金貨「分金」が流通し始めたころだったのでこの名がついたといわれています。花婿は袴かみしも（上下とも書く）を着るのが一般的でした。

〈綿帽子と角隠し〉

綿帽子は、頭髪を袋状の白絹ですっぽりおおう形式で、白無垢だけにあわせるものだそうです。花婿以外に顔を見せないという意味があるとされています。角隠しは、長方形の白絹を髪に留められるようにしたもので、本来は色打掛と本振袖に合わせますが、白無垢につけることもあったそうです。角を隠して従順になるという意味があるとされています。

庶民では簡素なものだけど、特別な一日としてとらえられていたように思いました。裕福な家や身分がある家では、たくさんお金を使ったりもできていたように思いました。さまざまに商売が増えたことが感じられます。

◆明治時代（一八六八〜一九一二）

欧米文化が入ってきたことにより、日本でも結婚式に様式美を求めるようになります。欧米の結婚式の流れを模して神社で儀式を行う「神前式」が生まれました。一般的に広まるきっかけは皇太子のロイヤルウェディングでした（神道式）。宮中で行われた翌年に、一般の人々を対象にした模擬神前式が行われました。式のあとに近くの帝国ホテルで披露宴が行われました。

歴史で勉強した文明開化があると思えました。

〈永島式結婚式〉

新しい結婚式のスタイルとして一九〇九年（明治42年）に行われた「永島式結婚式」は、「結婚式を荘厳かつ簡便に行いたい」と考案した出張型の神前式スタイルで、神主や巫女など神前式に必要な人材や道具一式を揃えて個人の家や会館などに出向いて行う新しい形も出てきています。

◆大正時代（一九一二〜一九二六）

大正時代になるとホテルや会館などでも行われるようになりました。結婚式と披露宴、ホテル内での美容

や写真館での撮影などを組み合わせた現在のホテルウェディングの原型が誕生しました。

◆昭和時代（一九二六〜一九八九）

神前式が隆盛を迎えるのは昭和20年代半ばからだそうです。第二次世界大戦が終わり戦後の結婚ブームが起けると、戦後民主主義と経済成長の波に乗り結婚式にも変化がみられるようになりました。結婚式専門の式場が次々とつくられ、それまで三三九度と親類縁者の祝宴を新郎の家で行っていた庶民の結婚式も、こうした結婚式場やホテル、会館などに場を移すようになります。戦前是一部の上流階級のものでしかなかった神前式も、広く一般庶民に普及していききました。

結婚式はすてきなあとと思っている人が多かったので広まったんだと思いました。そして、坂本龍馬はこんなところでも新しいことをしていると驚かされました。

〈新婚旅行の普及〉

坂本龍馬と妻のお龍が始めたとき、東京の新婚カップルが熱海や湯河原

に新婚旅行に出かけるようになった昭和の時代からだそうです。新婚旅行客の集中する下りの熱海行きは「新婚列車」とも呼ばれ、一九五九年（昭和34年）には同名の映画が上映されるほどメジャーな存在だったようです。

◆高度経済成長期（1970年頃）

- ・生活が豊かになり結婚式のスタイルも華やかになってきます。
- ・神前式が減少し、キリスト教式結婚式が主流に
- ・儀式はホテル内の神殿↓キリスト教教会と提携
- ・披露宴は宴会場↓チャペル（礼拝堂）で誓いの言葉を述べる
- ・花嫁は文金高島田に打掛↓白いウエディングドレスを着る

◆バブル期（1980年代）

ハネ婚の時代へ

結婚式への支出総額が増えました。新郎新婦がゴンドラやヘリコプターに乗って登場したり、レーザー光線やドライアイスを使用するといった大がかりな演出が話題になるなど、様々な結婚式のスタイルがありました。

ハブがずいぶんかっこいい思いました。

◆平成時代

（バブル崩壊〜オリジナル婚時代）

「自分たちらしさ」を追求する傾向が強くなり、オリジナルの演出や料理などが求められるようになりました。結婚式の会場もホテルや専門式場からレストラン、ゲストハウス、船上、ガーデンなどに拡大し、海外ウエディングや国内リゾートウエディングも人気。一方で結婚式にお金をかけないジミ婚も出てきます。結婚しても結婚式はしない、または少人数のパーティーなど、結婚式は両家ではなく自分たち主催で行う「披露型」↓「おもてなし型」へ。

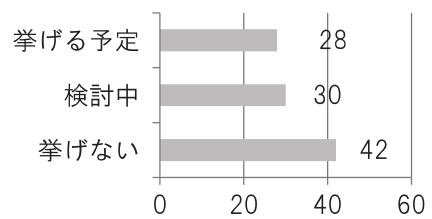
しきたりよりも自分たちの意見や考えを大切にしようとしているなあと思いました。

●令和の結婚観を調べよう

- ① インターネットで調べてみる
[② https://www.kagaenn.com](https://www.kagaenn.com)
- ③ <https://www.mynavi.jp>
 現在の結婚式を挙げる割合と推移を調べました。

④ より結婚前調査資料

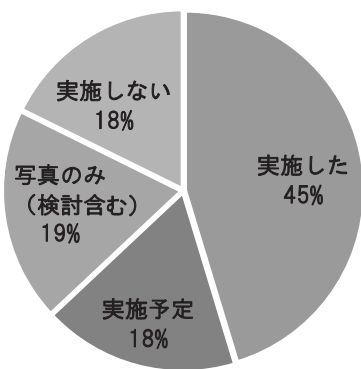
Q. 結婚式は挙げますか？



最初は7割くらい挙げたい人だろうと思っていただけ、挙げない、検討中という人全体で約7割を占めている結果を見て、挙げない人が思った以上に多くて驚きました。

⑤ より結婚後調査資料

結婚式の実施率



違う会社の調査ですが、結婚をした人の比率を見ると、結婚式を挙げ

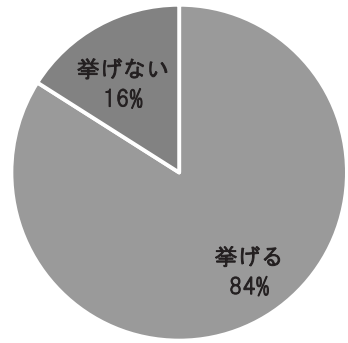
る予定の人は約3割だったけれど、実際に実施した人は約4.5割でした。実施予定も含むと約6割になります。減ってきているといいつつもスマートな形で簡単にでも結婚式をする人は少なくありません。年代別に見ると、若い人ほど結婚式にこだわらない傾向があり、写真のみの人も多いようです。

② 中学生の結婚式の意識を調べよう
 中学生12才〜14才を対象にアンケートに協力してもらいました。そして、結果から見えてくることを考察しました。

⑥の結果を受けて若い人の方が結婚式にこだわらないなら、もっと中学生はもっとこだわらないという結果になると思われるので実際に調査しました。

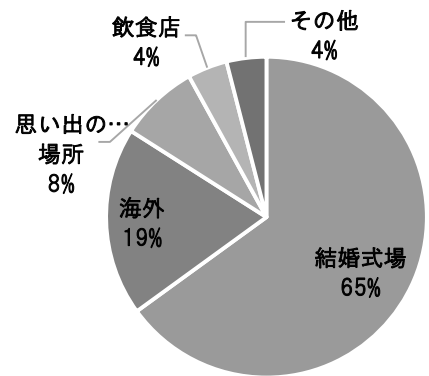
回答者 男・17人 女・15人

Q1. 結婚式を挙げたい？



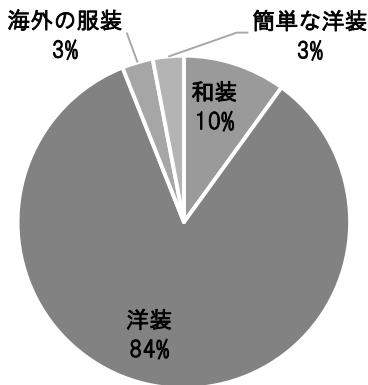
実際に調査をしたら、挙げたいという人が多いことが分かりました。挙げない人が多くてもおかしくないのに、中学生の場合は反対の結果になりました。それは、まだ金銭面の感覚があまりなかったり、テレビなどのいろんなことで結婚式にあげることがあると考えられます。挙げない人は、お金やはずかしがりやなどの性格を理由にあげています。これからは少数派の意見が増えていくのかなあ…

Q2. どこで結婚式をしたい？



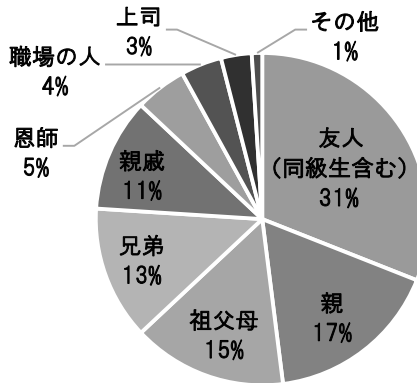
結婚式場が一番多いけれど、結婚式場以外の海外なども最近増えているし、結婚式場以外を足すと5%になります。このことから、いろんな結婚式のやりかたや、自分の思いにあわせて選ぶという人も多いと思いました。

Q3. どんな服でしたい？



親よりも友人(同級生含む)の方が多いことにおどろきました。中学生なのもあって、職場の人や上司が少なかったです。血族は半数を超えていることから親族を呼びたいという気持ちは少なからずあると思います。自分の身近な人だけがいいと思っている人が多いことがわかります。

Q4. 誰を呼びたい？



今はほとんどが洋装であることがわかります。和装へのあこがれが消えない人もいます。海外の服や簡単な洋装がいいという意見もありました。それはあまり服装にこだわっていないからだと思いました。

〈全体をとおして〉

結婚に対して理想をもっていることがわかります。それぞれ結婚観を持っていることがわかります。

③ 20代の人にアンケートをお願いします。
回答者 男…1名 女…2名

回答数が少ないのはつきり分かりません。けれど、結婚した足跡を残したいという気持ちは感じられました。フォトウェディングというのが回答にありました。聞き慣れない言葉だけれど、和装やウェディングドレスなどを着て写真だけ残すことです。式は挙げないけれど、ふだん着ない服を着たいという気持ちがあるのかもしれない。

①②③より：令和の結婚観

自分たちにあった結婚の形を自分たちが主になって互いに相談して決めていくんだなと思いました。ハデもよし、地味もよし。大切なのは自分たちの考えだと思いました。ジェンダーフリーや同性婚、籍を入れない結婚など、考え方が固執していない令和のいい所が現れていると思いました。

●福崎町の結婚式の移り変わりを探る
 いろいろな年代の人が集まるところでアンケートをお願いしました。

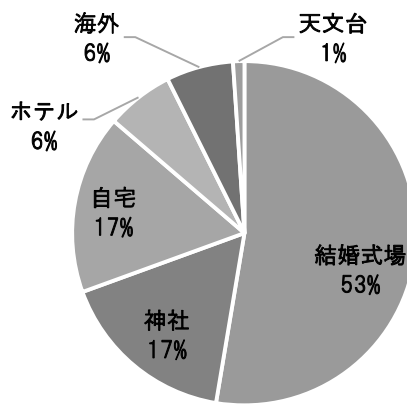
回答者 男・4名 女・8名

90代・1名 80代・2名 70代・1名
 60代・1名 40代・5名 30代・2名

Q1. 結婚式を挙げましたか？

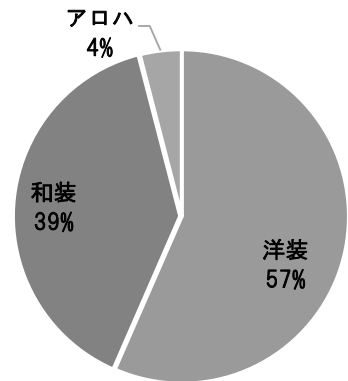
声をかけた人は全員結婚式を挙げた方ばかりでした。結婚式を挙げた人が非常に多かったことが考えられます。

Q2. 結婚式をした場所



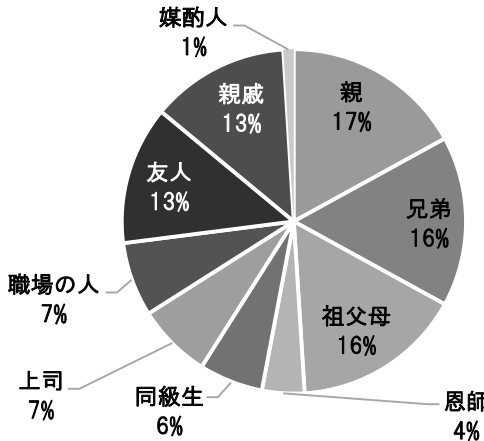
ほとんどが結婚式場のようには思いますが、年代でくると結婚式場や天文台や海外は40代の人が多く、ホテルは60代の人、神社は70代〜90代の人が多かったです。神社は熊野神社や鈴の森神社など近くの神社で行われたようです。

Q3. 結婚式のときの服装



式だけでなく披露宴もあったので、洋装も和装もチェックがはいる人が多かったですが、70代〜90代の人ほとんどが和装でした。ハワイでは正装がアロハシャツなので、アロハシャツを着たそうです（40代）

Q4. 結婚式に呼んだ人は誰ですか？



血縁者を呼んでいる人が多いです。

結婚式の参加者の多数は血縁者で占められていることがわかります。若い人（中学生や20代）に比べると職場関係や上司、恩師の存在も目立ちます。友人は控えめです。家同士のつながりや仕事場の関係を優先している時代を感じます。その他は媒酌人と呼ばれる人ですが、両家の間を取り持つ役割の人です。聞いたこともない言葉でびっくりしました。

さまざまな年代の人を調べること、結婚式の移り変わりで分かったことが福崎でもいえるんだなと思いました。

●大庄屋三木家の婚礼（江戸時代後期頃の福崎）

三木家とは、明暦元年（二六五五）飾磨から福崎町辻川の地に移り住み、姫路藩の大庄屋として地域の政治と文化の中心的存在だった家柄です。この三木家の婚礼についてまとめられた冊子があることを役場の人から教えてもらいました。江戸時代から明治の大庄屋の婚礼の様子がわかりました。

〈冠婚葬祭の時のみに使う部屋〉
 「役宅」

自宅なのに家人ですら通常は使用

できませんでした。家なのに家の人がふだん使わない部屋を日当たりの良い南側にドーンともってくるのが不思議に思いました。四つも部屋を使って結婚式を行っていたことから三木家が大庄屋だなど思ったし、家で結婚式を行っていたことが分かりました。南側に部屋をとったのは、お客様を第一に考えていることだと思いました。



「役所のみ」からみた「役宅」



特別展示パンフレット
 「三木家の婚礼」

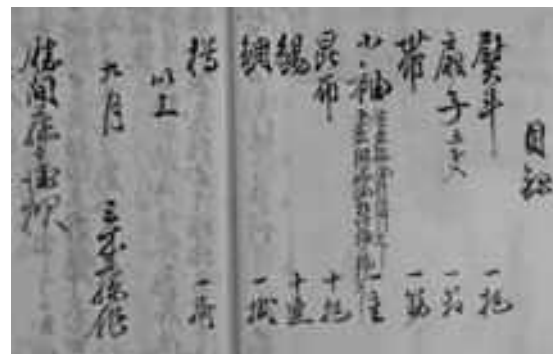


三木家7代当主通深初婚の記録
（「三木家の婚礼」）

〈江戸後期の縁談から婚礼まで〉
資料（『縁約一条諸控』）から、親が相手を選び、本人の意思はないことがわかります。また、今では自分たちで用意するけど、全て周りの人が決めて準備していく様子が分かります。日程までも本人以外が決めていくことも驚きましたが、日にち

が都合で何回も変更されていくことにも驚きました。前に調べたような結納という儀式もあります。ここでは三木家が大庄屋であることを感じる品物が送られていることから贈り物にもこだわりがあることがうかがえます。

髪斗	一 把
扇子五本入	一 箱
帯	一 筋
小袖	一 重
袴布	十 把
絹	十 連
銅	一 掛
樽	一 荷
以上	
九月	
三木藤作	



結納の品の目録
（『縁約一条諸控』三木家資料）



婚礼衣装
（明治30年ごろ 三木家資料）

花嫁の到着と祝言
とても華やかな着物なのに、人に見せびらかすことなく結婚式をするのが今と違うと思いました。どうして立派な物を見せようとしないのでろう。そこには周りの目を気にせずに結婚式をしたかったのかもしれない。初めて結婚相手と会うのが結婚式なんて！
びっくりしてしまいます。

〈江戸後期の婚礼の様子（当日）〉
『三木通深後妻婚姻様記』より
たくさんの人を呼んだり、手伝いする人も91人もいて驚きました。それに91人にねぎらいもすごく大変だと思いました。
華道ではおもてなしの心があるといわれていますが、家での婚礼には細やかな心遣いを感じます。場面に合わせて飾りを変えるところが日本らしさだと思います。

祝宴

結婚式とうって変わって祝宴は多人数でにぎやかに長時間することに驚きました。使われる食器の多くは赤と金色で、着物に似ています。めでたい色は赤というのは、昔からなんだなと思いました。

大きな桶から、参加者が多いことがわかります。メニューも豊富で、ぜいたくなこともわかります。しかも、土産としてお持ち帰りもできたそう、とても盛大な結婚式だと思いました。



祝樽 桶
(三木家資料)

三木家婚礼資料にみる松岡家との交流

福崎町で有名な柳田國男が婚礼に関わって驚きました。

庸一（うやうい）の結婚披露宴は、東京だけでなく四・五日も続くという事に驚きました。そこには四・五日も続くほど披露するものが多かったのかもしれません。けれど、とても疲れると思いました。すごい体力！

●明治期の福崎の婚礼

役場に行ったときに見せていただいた資料に明治期の福崎の婚礼について書いてありました。



明治150年記念 特別展
パンフレット「明治の福崎」

花嫁行列や花嫁衣装などの嫁入り道具を運ぶ列は見物人もたくさんいて、歌をうたったりしてとてもにぎやかだったと考えられます。

さまざまな嫁入り道具も人が運んでいました。今では嫁入り道具という言葉は聞かないし、20代の結婚式をした親戚のお姉ちゃんも、嫁入り道具なんて持っていかなかったと言っていました。結婚が本人のもの

というよりは家としての一大イベントとしてとらえられていることが分かると思います。

柳田國男は、幼い頃、辻川で婚礼の様子を見たことがあると言っています。その様子は明治時代の象徴ととらえていることがわかります。身分が高い人だけでなく、一般の人々も同じような婚礼を挙げるようになっていったと思われれます。



嫁入り道具を運ぶ長持
「明治の福崎」より引用

辻川区の家に配られた『民俗学のふるさと辻川』には、辻川で再現された花嫁行列のことが紹介されていました。

辻川区の人が協力して歴史の変化を伝え残そうとする様子がすごいと思いました。私も機会があったら参加してみたいです。



資料の表紙にも婚礼の様子が描かれています

柳田國男は二回結婚式の男蝶（おちよう）をつとめています。儀式が非常に面倒くさいと言っているし、儀式の様を読むと堅苦しい感じがありました。今とは全然違うなと思いました。

●最後に：

結婚式をたどっていくことで、その時代の考え方にふれることができました。今しか知らないのはどんなことでもさみしいことだと思います。昔があるからこそ今の私たちがいるので、昔をたどることで今を大切に生きようと思うことができるからです。

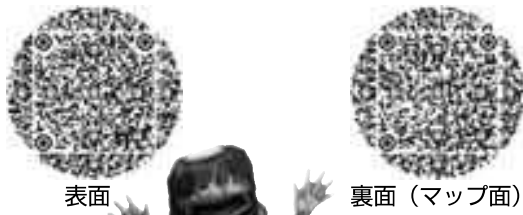
今では考えられないようなならわしもありますが、昔から今まで共通しているのは幸せなスタートを周りがサポートし応援している姿であり、新しい生活に向かう決意が結婚式の形なんだなと思いました。

最新版「福崎町指定文化財マップ」を作成しました!!

文化協会では、文化財をとおして郷土愛を育み、地域の活性化に役立てていただくことを願い「福崎町指定文化財マップ」を作成しました。

古くから交通の要衝として栄え、周囲を緑の山に囲まれ、中央を市川が流れる福崎町。町には先人たちが遺した文化財が数多く存在しています。

ぜひ、マップを片手に町内を散策し、これまで気づかなかった地域の魅力を探してみてください。



表面

裏面 (マップ面)

「指定文化財マップ」は折りたたんだ状態でA4サイズ。広げるとA2サイズでとても見やすいぞ。



マップは、文化センターのほか、社会教育課、歴史民俗資料館に配置しています。

また、町のホームページでも公開しており、いつでもお持ちのスマートフォン等でご覧いただくことができます。ぜひ、ご活用ください。

問い合わせ先 社会教育課

☎ 22・0560 (257)

福崎町文化協会 お知らせ

令和7年5月17日、福崎町文化協会と福崎町公民館クラブ連絡協議会を統合した、新しい福崎町文化協会が誕生し、設立総会をエルデホールで開催しました。

旧福崎町文化協会は、昭和61年に設立しました。他市町の文化協会のほとんどが、趣味特技を同じくする人たちが結ばれた各種団体の連合体となっていますが、福崎町の文化協会は、福崎町が柳田國男や松岡家のことから、主に柳田國男や松岡家の顕彰に努めてきたという特徴があります。柳田國男や国文学者で歌人の次兄、井上通泰を顕彰する「短歌祭」、日本画の大家で末弟の松岡映丘を顕彰する「写生大会」、そのほか、「ふるさと文化祭」などの活動も行ってきました。

一方、公民館クラブ連絡協議会は、昭和46年の文化センター開館のころ、すでに14クラブが活動を始めていました。その後長きにわたり「発表会」、「福崎秋まつりでの展示」、「八千種研修センターまつり」など、文化の向上・発展に尽くし、各種の文化活動の発展とクラブ活動の充実に努めてきました。

しかしながら、近年では、両団体とも会員数の減少が顕著となり、また、高齢化も避けられない問題となってきました。

そこで他市町の文化協会を参考に、公民館クラブ連絡協議会との協議を重ねた結果、両団体が統合し、新たな文化協会として生まれ変わることとなりました。当面は、両団体が行っていた各種の事業はそのまま継続して行っていきます。

これからも引き続き、町の文化の振興に取り組んでまいります。ご支援・ご指導よろしくお願いいたします。



柳田國男とその兄弟

公民館クラブ会員募集

町には住民の教養の向上、健康の増進、生活文化の振興、社会福祉の増進を目的とした社会教育法に基づく公民館が2つあります。一つは中央公民館として文化センターがあり、もう一つは分館として八千種研修センターがあります。この両施設や地域の公民館などを利用して住民が生涯を通じて趣味や教養に自主的に取り組む多くの団体が活動されています。

現在、コーラス、吹奏楽、書道、ちぎり絵、パッチワーク、パソコン、短歌、俳句、英会話、中国語教室、将棋、囲碁など、多数のクラブが活動され、定期的に公民館で発表されています。

各クラブは、それぞれで会員を募集しています。知識・技術を習得したい、その成果を地域へ還元したい、活動を通じて友人を増やしたい、等と思われる方は是非、挑戦してください。

また、新たにクラブを作って活動したい方も要件さえ満たせば、文化センターなどの施設を有利な条件で利用できます。是非お問い合わせください。



問い合わせ先 福崎町文化協会事務局 (文化センター内) 22-3755

第四十四回 福崎町美術展作品募集

第四十四回福崎町美術展(公募展)の作品を募集します。

皆様方のご応募を心よりお待ちしております。

会期 令和八年

六月十二日(金)

六月十四日(日)

会場 福崎町エルデホール

主催 福崎町・福崎町教育委員会

部門 日本画・洋画・書・写真・彫塑・工芸

応募は一部門一人一点、未発表の作品に限る。

作品搬入 令和八年

六月六日(土)

午前九時～午後四時

審査員

日本画 水田 陽子

洋画 三浦 孝宣

書 池永 碧濤

写真 森井 楨紹

彫塑・工芸 山本 喜容子

山桃忌奉賛

第四十一回短歌祭作品募集

柳田國男先生と井上通泰先生の命日にちなみ、両先生を偲ぶ会として、毎年八月に柳田國男・松岡家記念館により山桃忌が行われています。

短歌祭は文化協会と福崎短歌会により、山桃忌の当日に行っています。

本年の短歌祭は、左記の要領で作品を募集します。

日時 令和八年八月二日(日)

場所 福崎町文化センター

主催 福崎町文化協会・福崎短歌会

作品 未発表のもの・一人二首以内

応募料 一首につき五百円

要領 原稿用紙に楷書で縦書き

宛先 福崎町文化センター内

文化協会事務局 宛

締切 令和八年六月三十日(火)

表紙の写真

表紙の写真は、国登録有形文化財、旧辻川郵便局です。大正12年に三木家9代当主・拙二により建てられ、電信電話局の役割もしていました。平成31年に三木家の西隣から東隣の現在の場所に移築されました。現在は「NIPPONIA播磨福崎蔵書の館」の一部として、1階はブックカフェ、2階は客室として利用されています。



編集後記

たくさんの方々のご協力により福崎町文化第四十二号を発刊することができました。寄稿いただいた皆様、校正等にご協力いただいた皆様に厚くお礼申し上げます。